

成年向



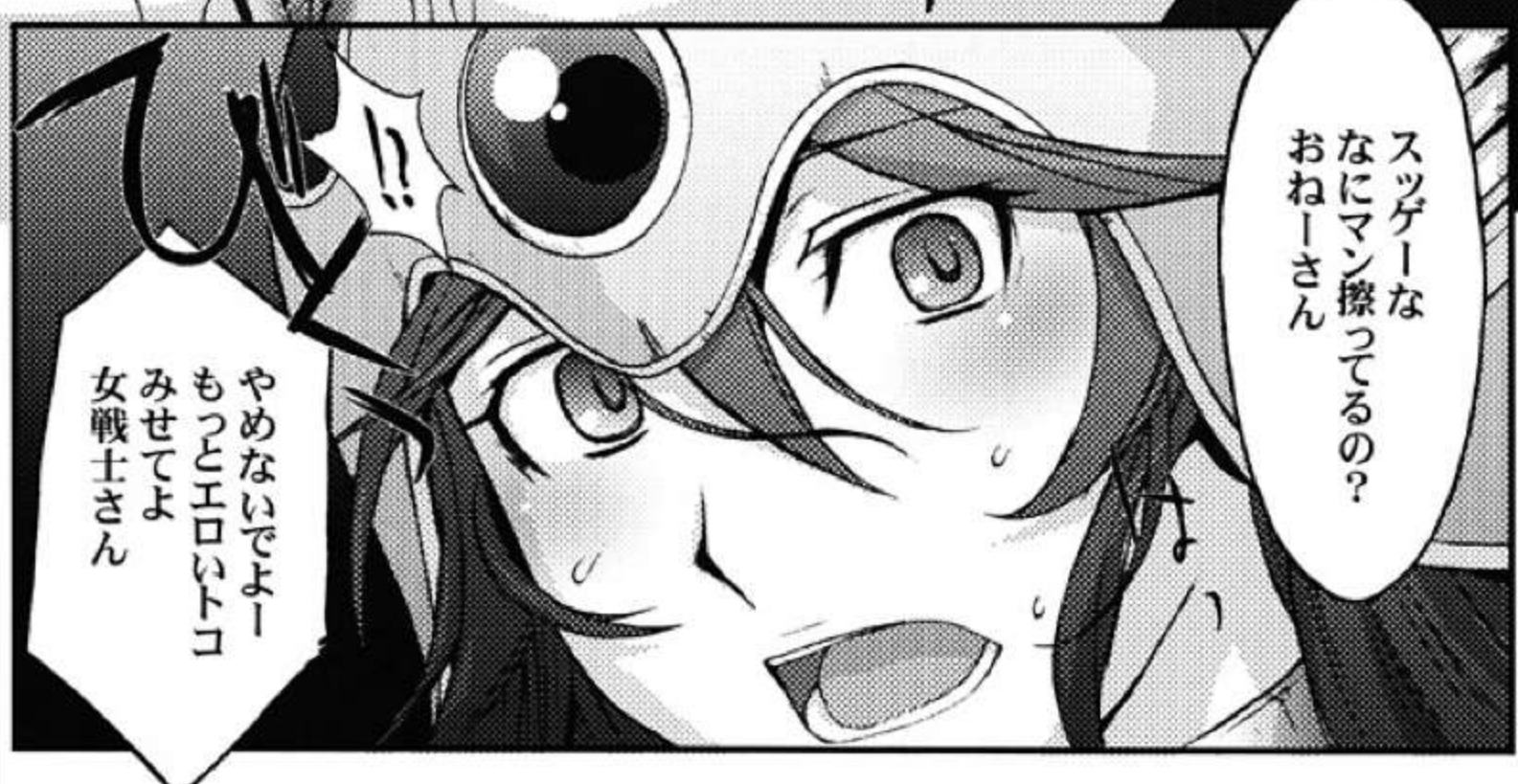
人妻女戦士
禁忌の魔姦

CELLULOID BROTHERS



あの日以来
私は何時でも
何処でも
発情する

羨のなっていない
犬のような
おまんこ
抱えるようになった



スツゲーな
なにマン擦ってるの？
おねーさん

やめないでよー
もつとエロいトコ
みせてよ
女戦士さん



コレ使わない？
おねーさん
気持ちいいよ

指なんかより
奥まで届いて
擦ってくれるよ？



露出狂
なのかな？
途中参加アリ？

うわっ
だったらオレも
溜まってるのよ

何だ
このマンコ

オナホより気持ちいい
びゅーびゅー出るわ

な...なか...
腔内です

精子
でてる

あつ

妊...



孕んじやつても
仕方ないよね
こんだけみんなに
腔内射精されればさ

ダンナさん居るんだろ
このヘンでやめとく?
おねーさんさ

だめ

スイツチ入っちゃった
若いんだからチンポ
折れるまでつきあつてよ



じゃケツマンコ
使っちゃつても
いーよね?

びゅーびゅー

スゲツ

人妻女戦士の
ケツマンコ
サイコーツ

人妻

あー
いー
うー

あー
いー
うー

あれえ
血とか出てない？

「アナル処女」
だったの？
おねーさん

そうれふう
おしりのあなは
しよじよれふう

おねーさん

仕上げは
おうちマンコで
キレイにしてね

美人なのに
スゲ舐め方
しちゃうんすね
ドンドンやってー

アナル
に
い
て

ウチのパーティー
戦士と女便所
欲しかったんだよ

おはは

おはは

おはは

おはは

これからも
ヨロシクね
人妻女戦士
ステラちゃん

アナル

アナル



もちろん
ばふばふOKですよ
チンポもばふばふ
できちゃいます

なんだよ
露出狂じゃねーか

おまんこも
ケツまんこも
膣内射精もアリです

乳でけーけど
タダのパイスリ
じゃねーか(笑)

オオオ
オオオ
オオオ

さまさま
ステラちゃん
みんなにアピール
しなきゃ

エロツ
でも
美人

ちよつと使い込んで
ますけど気持ちいい
名器ですよ

このいやらしい躰で
遊んでみませんか？
1回100Gです

なんか股間
濡れてね？

それじゃ
まんこ
一番乗りな

いいのお

ちんぽが
おまんこに
入ってくるのお

まんこ
おまんこ

おまんこ
もっこ
奥突いてえ

ひあー

もっこもっこ
ちんぽ汁出してえ

おほお

まんこに注いで
孕ませてえ

おまんこ



やがて私は
少年たちの
パーティーから
外された

あの…
女戦士さん

飽きられたのだ
私は疼く軀を
紛らわせ酒浸り
の日々になった

いっしょに戦って
欲しいんです

んー
他あたって
くれる？

私じゃなくても
戦士はいるわよ

ボクはバラモスを
倒します
だから…

行くよ
勇者クン

ステラさんが
欲しいんです！

私は疼きを堪え
再び旅に出る
この少年…
勇者アレルと共に

人妻女戦士
禁忌の魔姦



作・八潮タイガ
挿絵・有沢証春

むつちりとした大きな乳房が揉みしだかれていた。

薄い褐色の肌は双乳の辺りだけ日焼けを免れ、白く完熟した実のように揺れる。

——女戦士ステラは行きずりの男と安宿で一夜を過ごしていた。

歩けば誰もが振り返るほどの美貌の持ち主である彼女がベッドで仰向けになり、乳房を男に玩ばれる。鎧を身につけてはいるものの、赤を基調とした派手な装備であり、肌の露出が多く、踊り子衣装のような猥褻感が漂っていた。対する男は、冴えない中年風の典型的なスケベ親父といった面構えであり、とてもこの美女を相手にするとは思えない不釣り合いな光景だった。

彼女は男の愛撫を受け入れようと腰の位置をずらす。少し動くだけで部屋に充満していた汗の匂いに吐息が混ざり、強烈なフェロモンとして男のソレを刺激する。

「極上の美人戦士が俺みたいなのオッサンを逆ナンパとはなあ……へへへ」

ステラの顔の間近で中年男は下卑た笑みを見せながら言った。

美しい女戦士は女盛りの二十九歳であり、人妻である。しかし夫とは「ある事件」以来別居中で、気ままに男漁りを繰り返す日々が続いていた。

天性の淫乱であるなら、そういうこともあるのかもしれない。が、ステラは夫と別居をする前まで、夫以外の男を知らなかった。

彼女は男漁りとは無縁でいたのだ。しかし今では換えの下着を必要とするほど濡れやすくなり、下着を穿かずに町中を徘徊することもあるほどの淫乱妻になっていた。いつもピンク色の霧が掛かったような思考は、自然と下品な想像をもたらしてしまう。

子宮が疼いては陰唇を掻きまわらなくなる衝動が起こり、どこでも男のチンポを銜え込む淫乱女戦士として、夫との別居以降、何人も男と肉体関係を持っていた。

多少の罪悪感があったものの性欲には勝てず、それまでは受け身一辺倒であった彼女は積極的な性技も覚え、己の快楽をいかに呼び起こすかということに念頭にセックスを愉しむようになる。性交で満足出来ない場合は剣の柄を膣に差し込み、貪欲に自慰をしてまで快楽を得たこともあった。

今夜の男は鎧姿に興奮するらしく、ステラは女戦士の鎧を装備したままの性交を求められた。だが、大きな乳房を二つ収めた胸鎧はすでに背後の金具を外され中身の柔らかな乳肉が惜しげもなく外に晒されている。

「でけえ。何食つたらこんな乳牛みてえな乳になるんだ？」

男は無造作に乳を掴み、おおよそ愛撫とは思えない扱いをステラの乳房におこなう。極め細やかな肌が男の指に吸い付き、乳肉の柔々とした感触を堪能した。その心地よさに任せ、男は乳首を引っ張り上げる。

「んっ……あっ」

乳房に対する男の陵辱にも喘ぎ混じりの声を上げるステラ。背筋を通り抜ける快楽を受け止めて息を乱し、稚拙な男の愛撫にも反応していた。耳まで真っ赤に上気したその姿は苦しげに見えたが、焦点の乱れた瞳が潤み、惚けたように反応する。そんなステラの様子を男は満足げに見下ろした。

「そろそろマンコの茹だり具合でも見てやるよ」

中年男の不躰な指がステラの白い太股の内側をさすり、付け根へと移動していく。下半身の股ぐらを覆う鎧がめくられ、彼女は自分の鼓動が羞恥で早さを増したことに気付く。慰み者として扱われる時ほど、女戦士の鎧に卑猥さを感じる事はない——ステラは口から熱い吐息を洩らしながらそんなことを考えた。普段はいくら素肌を見せていても恥ずかしくない鎧だが、こういったときになると淫乱痴女のような格好なのを嫌でも認識させられるからだ。小さな面積の股間鎧の下から、秘所を覆う黒ショーツが男の目前に姿を現す。動きやすさを重視したせいで女戦士の鎧はあらゆる軽量化が施され、陰毛が透けて見えるほど極小のショーツにまで及んでいた。確かに平原や森林でのモンスターとの戦闘時は機能的である。だが、一步街に入れば女戦士の鎧は男達から好奇の目で見られる。

（あの武器屋の禿男、鎧姿のわたしのことをいやらしい目でずっと見てた。道具屋の前にいる男の子もジロジロ見てる……きつと今晚のオナニーのオカズに使うつもりなんだわ。スポンの股間をあんなに膨らませて……）

ステラは欲望に満ちた男達を敢えて選んでは連れ込む。今夜の相手は酒場で同席したのがきっかけだった。執拗にステラの身体を触ってきたので、彼女は中年男を自分の性欲の捌け口に使おうと決めた。

「こんな陰毛丸出しの布切れだけで街中をうろつきやがって。男を誘つてるとしか思えねえぜ」

股間に張り付くショーツを「陰毛丸出しの布切れ」と言われ、ステラの顔に赤みが差す。火照った肉体の奥から雌の蜜が股にじんわりと滴るのを感じた。その恥ずかしい部分を左右の太股の間から中年男に観察されていると思うと、さらに大量の蜜が染み出てくる。事実、そこは汗よりもねっとりとした液体にまみれており、ショーツに食い込んだ割れ目が涎を垂らして何かを啜えこむのをねだっているようだった。

「……少しの前戯でここまで愛液で濡れちまつてるぜ」

中年男はそう言いながらグイグイとショーツを割れ目に擦りつける。紐状になったショーツからは薄く色づいた陰唇が見え隠れしていて、適度な濃さの陰毛には蜜液がぐつしよりと濡れてまとわりついていた。

「ああ……食い込ませちゃだめええええええッ！」

日常で会話するときには絶対に出さないような女戦士の嬌声が室内に響いた。必死に声は出さまいと誓っていた彼女だがショーツを濡れた割れ目に押しつけられ、流石に快楽の波に耐えきれなくなったのだ。ステラの反応に満足げな中年男はショーツをゆつくりと焦らしながら横にずらしていく。わたしがいつも隠している大事な部分を見られてしまう——辱めに震えるようにステラのダークパープルの髪がベッドシートの上で絹のように揺れた。

とうとう彼女の股間からはべっとり白濁した愛液まみれになった淫らな秘部が曝された。中年男は割れ目の上にある堅くなった肉芽を人差し指と親指で摘む。



「あ、あふうッ！」というステラの悦びとも驚きとも言えない嬌声が発せられ、中年男の劣情を刺激した。立て続けにその淫らに勃つた陰核を中年男は唇で啄む。ちゅちゅという接吻のような音の次には、何かの汁を吸いたくるような品の無い音がステラの股間から聞こえた。

「すげえな。こんなトロトロした濃いマン汁……味もスゲエゼ。膣内に舌入れるとギョウギョウ締め付けてきやがる。こいつは一晚中でも愉しめそうだ」

肉襲の一枚一枚を丹念に味わうような舌使いで中年男はそこを舐め吸った。ステラの肉体がそれに応じるように快感を貪り始めている。足の指が開いたり閉じたりを繰り返して、陶磁器のような美しい背中が弓なりに反っていく。中年男の頭を抱えながら、ステラは自ら股間を男の口に押し充て無言でさらに激しい性器愛撫を要求した。三十路を控えた女の手に掛ければ、男など白濁液を溜め込んだザーメン人形ではない。年端もいかない少年を色気漂う巨乳をちらつかせてたぶらかし、童貞を奪い、初めて精通させたこともあった。その少年とベッド上の中年男の舌使いを比べながら、ステラはだらしない目尻の下がった淫蕩なアヘ顔となっていく。愛液で溺れるかの錯覚に、男は性臭で咽せ、口にまとわりつく精液のように白く濁つた愛液を拭いた。

「マンコだけじゃ足りんたろ？」

ずぶり、と中年男の人差し指がぬかるんだ割れ目のから滴る愛液で潤んだ肛門に突っ込まれ、その刹那、腰が勝手に浮き上がるような快楽がステラの全身を駆け巡る。

「あぐうッ……うぐッ……ああああん……ゆ、指ッ……！」

思わぬ刺激にステラが痴態を見せ始めたと同時に、複数の指が淫裂の奥に差し込まれ、ステラは乳房の先端の乳首がさらに鋭角に尖っていく感覚に捕らわれる。くちゅくちゅと複数の指で濡れた膣内を穿る音が室内を満たしていく。ステラの腰が円を描くように娼婦じみた動きを見せ始め、男の指が潤んだ内部をさらにかき混ぜた。

「あなあ……お尻の……あなあ……いい……いとお」

子宮がピクリと痙攣し、ステラは軽く達してしまう。男の指が肛門括約筋によって抜き差しならないほどに締め付けられていた。ピュッピュと飛び散る愛液が指に滴り潤滑油となることで指は抜けたが、ステラは腰を浮かせたまま余韻に浸っている。

流星の美貌も汗と涙と涎にまみれてしまうが、それでも大きくは崩れず、美しさを保っていることが痴態を見せる戦士の唯一の救いだらうか。

胸で呼吸し、横たわるステラを眺めながら腰のベルトを外す男。ズボン脱ぎ、屹立した陰茎をステラに押し付けると、無防備に股を開いた女戦士の瞳に大きな男性器が映り、昂ぶった欲情が卑猥な笑みとなつてこぼれる。

「その太くて大きいチンポを私のマンコ穴にねじ込んで欲しいの。ねえ、早くうッ！」

（あれをトロトロに蕩けきったオマンコの中に入れて、腰が立たなくほど犯されちゃうのね。長旅で男日照りだったわたしには最高の御褒美だわあ……うふふふ）生唾を呑み込んだステラの喉がぐくりと鳴り、無意識のうちにピンクの舌が唇を舐め吸る。モンスターの戦闘とは別種の、性欲の昏い炎が女戦士の瞳に宿っていた。

あまりの色香と獲物を狙う野生動物のような視線に戸惑う男の元へ舌なめずりをしながら近付き、ステラは淫魔のような仕草で雄の勃起したチンポを招いた。中年男はステラの太股を持ち上げた正常位の体勢で亀頭を蜜に濡れた部分に押し当てて。

「ああッ……んああああああ……チンポが入ってくる……！」

ステラは上ずつた声を出しながら中年男の腰にブーツを履いた両脚を絡ませた。大きく反り返つたペニスの雁首が膣壁を抉っていく快感に、女戦士は思わずシートを両手で握り締める。緩慢だった中年男の前後運動が徐々に勢いを増し、見事な大きさに勃つた男性器に膣内を突き回され、ステラは自分の肉体が精液を欲しているのを改めて知った。

「チ、チンポおつきい……あぐう……んあああああああああッ……！」

ステラの内部が赤紫色に怒張した剛棒で抉られていく。太くて堅いそれが一突きされるたびにベッドが軋み、彼女の巨乳がぶると弾む。身につけている鎧が擦れ合い、大きく金属音を響かせてしまう。ステラは隣部屋の聞こえているのではないかと緊張を感じたが、やがて背徳的な快楽に変わった。

「聞こえちゃう。隣の部屋に聞こえちゃうよお……あああッ……！」

その言葉に興奮した中年男の腰振りの動きが激しくなり、彼女の肉襲が卑猥な生き物のように収縮を繰り返す。ステラは女戦士という職業柄、下半身の肉付きが良いため、通常の女性よりも遙かに膣圧が高く、間違いなく名器と呼ばれる類であることと中年男はゲイゲイと食い締められるペニスを以て体感した。中年男が驚掴みにしていたステラの両胸が楕円に歪む。

「絞まりすぎだッ……で、出る……出ちまうよッ……外にッ」

思わず腰を引こうとする男に対し、足を絡ませ抜けない様に腰を固定するステラ。

「中で出してッ！ 孕ませてええッ」

本心とはとも思えないステラの叫びが中年男の快感に追い打ちを掛け、それが射精の合図となった。

「あぐうッ……ドピュドピュ……ドクン！」

一際大きく腰を打ち付けた中年男の鈴割れから白濁が一気に噴出して、ステラの子宮口を二度三度びゅくびゅくと叩く。彼女の頭の中は白濁に塗り潰され、男の精液を複雑に蠢く膣内で搾り取ることに考えられなかった。

「ああッ……イイッ……んッ……イクッ……！」

体内の一番奥で熱い子種汁を大量に浴びながらステラも絶頂を迎える。

快楽で弛緩した表情になり、肉茎を受け入れている割れ目から、泡だつた精液が沸騰したミルクのように溢れてくるのを彼女は感じていた。

「オマンコ……中出し……キモチイイ……精子で……子宮犯されちゃう……孕んじやう……」

性交の快楽を貪り、満足げな譚言がステラの美しい口元から漏れる。

▼
宿屋で行きずりの男と一晩中繋がっていた翌日、ステラは勇者から三日間の自由行動の時間をもらった。パーティーから離脱した彼女が向かったのは、鬱蒼とした森の入り口である。その近くの朽ちた木製の立て看板には『モンスター多発地域につき進入禁止』と書かれているが、それを無視して彼女は森の中を進む。

以前、草木に半分ほど埋もれたこの道を通ったとき、ステラの横には永遠の愛を誓った男が居た……。宿をとった街から離れていないため、彼女は記憶を頼りに来てみたのだ——この忌まわしい場所に。あの時から性交に飢え始め、狂ったように男を漁り始めた。そう、人生の歯車が狂いだしたのは、あの時から始まったのだ。

——二年前、ステラと夫は新婚旅行で、いくつもの城下町や村を観光していた。その日、次の目的地の街には夜になる前に入っておきたい……。そんな焦りが夫婦の間にはあった。

「……ここが次の街に通じる近道らしい。なあと、本業の戦士が二人もいればこんな場所なんて乗り越えられるさ」

鎧姿の夫は地図を片手に、近道である森の入り口にある警告の立て看板を取って無視した。ステラは一瞬、嫌な予感を抱いたが「もう夕方だ、急ごう」という夫の声に背を押され、森の中へと足を踏み入れた。木々の枝葉が予想していたよりも陽光を遮っており、当然ながら視界は芳しくない。

二人の戦士が森の中を慎重に進んでいくと、樹木の密度が極端に低い広場のような光景が待っていた。空気が硬化化したことに緊張の色を二人は顔に浮かべる。このような不自然にひらけた地点にはモンスターが集まりやすいからだ。地面には人間のものとは思えない足跡がいくつも残り、長い草が何かの力を受けてなぎ倒されているのを夫婦はすぐに発見した。この辺りに洞窟の出入り口があるのかもしれないし、或いはモンスターたちが人間を待ち伏せする場所なのかもしれない。

「ステラ、準備はいいか？」

「……うん」

背中合わせになつたステラと夫に鞘鳴りの音が二つ続く。

夫婦は互いに剣と盾を手にして茂みの中をじつと注視している。

唐突にそこから宙を浮く不思議な生物が出現した。その生物の目は虚ろで、胴体の下にのびているロープのような黄ばんだ触手が風もないのにゆらゆらと靡いている。

「ホイミスライムか……。仲間を呼ばれないうちに仕留めるぞ！」

ステラは敵に攻撃しようとしたが、周りの気配にただならぬ物を感じて狼狽した。

「あなた、わたしたちモンスターに囲まれてる！」

夫がホイミスライムに斬りかかった。しかし、森の奥から無尽蔵に現れるホイミスライムの大群たちに触手で全身を縛り上げられてしまう。

「ステラ、早く逃げるんだ……！」

女戦士は夫を救うためホイミスライムの取り囲む輪の中に颯爽と飛び込んでいく。剣を何度も振りつつ彼女は夫に巻きついた触手を刻んだ。輪切りになった触手からは緑色の体液が雨のように飛散し、大地に染み込んでいく。ようやく夫を触手の束縛から解き放つたのも束の間、今度はステラが触手に身体を縛られた。

「ステラ、今助けるからな！」

触手がステラの両腕を縛り上げていくのを見ていた夫は必死に叫んだ。だが、ホイミスライムたちが夫をそのままにしておくわけがない。あつという間に夫もステラと同じような行動不能の状態に再度陥った。触手によって美しい四肢をXの形に広げられて宙吊りにされてしまったステラ。彼女は正面にいる愛する夫を見た。彼は胴体を触手に絡め取られ、まるで芋虫のような無様な格好で地面に横たわっている。ステラは力を込めて触手を引き千切ろうとしたが無駄だった。もう、蜘蛛の巣に捕らわれた蝶のように為す術がないのを彼女は自覚する。

モンスターに何をされるのだろうか——そんな恐怖がステラの心の中に渦巻いた。モンスターは一般的に、この世界のどこかに存在する魔王が作りだした物とされているが生態は謎に包まれている。モンスターは常に性欲を持って余しており、時には人間の女を襲うという話をステラは他の冒険者から聞いたことがあった。もしも、それが本当だとしたら自分はこの後、モンスターの大量に……。その最悪の予感を裏付けるようにホイミスライムの触手がステラの太股の弾力を確かめるように絡みついてくる。

「化け物め、ステラの身体から離れろっ！」

夫がモンスターたちを威嚇しながら怒鳴りつけた。しかし、無慈悲な彼等の返答はステラの胸鎧を力ずくで引き剥がすという卑劣な行為だった。

「きゃあああああああああああああああああああああッ！」

ステラが羞恥の悲鳴を上げる。

双乳がたぶんとこぼれ落ち、その艶めかしい乳房にホイミスライムが興味を持った。幾本もの触手が乳肉を指して勢いよくステラの身体に伸びてくる。その様子を夫は地べたを這いながら怒気を露わにした形相で睨み付けていた。新婚で夫以外に男を知らないステラは触手に身体を弄ばれても、絶対に快楽など感じまいと胸中で誓う。

自分が肉体を赦すのは愛するあなただけ——そんな意志を込めて地面に転がっている夫の瞳を見つめ返した。ステラの純真無垢な愛情が夫に向けられているのを察知したのか、触手の動きが猥褻なものになっていく。

「む、胸は……。いやあ……。いやなの……。やめてッ！」

上下から触手で縛られた柔らかな乳房が前方にくにゅりと押し出されてしまう。胸の頂点の突起はあどけない少女のような薄桃色で、若干乳輪が大きく、健康的な張りりと光沢が艶々と宿っている。ホイミスライムたちは、ツンと上を向いて堅くなっているステラの性感帯であるそこを観察した。彼等は仲間内で何やら無言の会話をしていくらしく、それが終わると触手の先から、さらに細い触手が出てきてまるで人間の手のような形に変化していった。



ホイミスライムの触手……というよりも手がステラの熟れた乳肉を下から持ち上げるようにして揉んだ。そこへ別の手が割り込んできて、指先で彼女の敏感な突起を弄り始める。

「んひっ？」というこれまでとは違った声がステラの口から聞こえ、モンスターたちは偏執的に尖った乳首を何本もの手で翳つてみる。ステラの勃起した乳首を摘み、引つ張り、転がし、モンスターたちは美しい雌が羞恥に震える反応を愉しんだ。ああ、乳首をそんなに責め立てないで——奥歯を噛みしめながら快楽の声を懸命に口の中に留めた。

（モンスターに肉体をオモチャにされて感じるわたしは……どうかしてるんだわ。そう、そうに違いないのよ。あううう……乳輪ごと乳首を引っ張つたらだめええええええ！）喘ぎ声を堪えていても不規則に息が乱れて、乳首は薄手の服では隠せないほど堅く勃起してしまう。下半身もホイミスライムの手にまさぐられ、彼女は太股に力を入れてそれを拒もうとしたが四肢は動きを封じられてびくともしない。ホイミスライムの手がステラの鎧の下のショーツを掴み、そのまま無慈悲に引き裂いた。それを見ていた夫は怨嗟の言葉を敵に浴びせたが、触手を口に噛まされていて不明瞭な雑音にしか聞こえない。

モンスターの指が女戦士の秘部を開き内部をめぐり上げていく。包皮から剥けてしまった股間の肉芽は、彼等にとつて触り心地の良い淫猥な遊び道具でしかなかった。そこを摘んだり指先を振動させて擦るだけで、ステラの身体は面白いように反応する。「んっ……ダメよ、そこ弱い！ あひいひいひいひいッ！」

夫以外に肉体を赦したことがないステラは遂に淫らな声を出してしまった。あなた、御免なさい——胸中で夫に詫びたステラであったが、快感を身体に押し込めるのは限界に達していた。このままでは夫婦揃ってここで息絶えてしまうのは時間の問題だ。そんなとき、ステラは女だけが使えるモンスター対処法の噂を思い出した。その方法とはモンスターの性欲を満たしてやれば、大人しくその場から彼等は去っていくというものだ。それを試して成功した女性をステラは見たいことはないが、ここで何もせずモンスターたちに全滅させられるくらいなら、ほんの少しの可能性に賭けるしか選択肢は無かった。生き延びるためなんです、どうかモンスターとの淫らな行為を見逃してください——懺悔は夫に対してなのか、教会の厳格な神父に対してなのか。ともあれ、彼女が自ら進んでホイミスライムの手を口に含んだ事により、懺悔の意味は明確なものとなった。新妻のステラは夫婦で生き残るため、豊満に熟れた肉体をモンスターたちに差し出したのである。口の中に頬張つたモンスターの手は収束して元の触手に戻り、なにやら人間の男性器を連想させる大きさと形になった。

『触手がモンスターの性器なのではないか？』とステラは直感して試しに口に入れてみたのである。それは正解だったらしく、触手はペニスとなって口内で暴れている。

「んむっ、はむん……んぐうううう……うばおッ！」
まるで男の性臭に酷似した獣臭がステラの口一杯に広がった。

一本の触手ペニスを咥えていると、さらに二本目が無理矢理に彼女の口内へねじ込まれた。女戦士は無我夢中で舌先を捌きながら雁首を舐める。夫にだけ使ってきた舌捌きをモンスターに使っていることに涙が溢れてきた。新妻なのにモンスターに口を陵辱されている——そんな後悔の念を抱きながら囚われの夫へ目を向けた。無力な夫の瞳に凄まじい嫉妬の炎が灯っている。ステラは涙が溢れる目を夫から逸らした。ホイミスライムは幾本もある手でステラの頭を固定して前後に揺さぶり、変形させた触手ペニスで口内を犯していく。ずびゆる、と白濁した液体が彼女の喉奥に発射され、間髪入れずに次の触手ペニスが内部に突っ込まれた。立て続けに二度目の白濁液を呑み込まされて「あぶうっ」と息継ぎをした彼女だが、それもすぐに触手ペニスを咥え込まされ、くぐもつた声になる。そして触手ペニスはステラの口内だけでなく、蜜を垂れ流している股間の割れ目と尻の穴まで一気に下から突き上げた。

「んぎひいひいひいひいひいひいひいッ！」
ステラの悲鳴が森の闇を引き裂く。彼女の二つの穴の中で触手ペニスが快感を貪り、モンスターたちは獲物を翳ることに悦びを感じているようだった。女戦士の顔は拒絶から恍惚へと目まぐるしく変貌した。それは触手ペニスの先端が人間と違い、疣状の突起が無数にあつたからだ。その疣突起で肉壁を穿られると強烈な快楽が襲う。身体の内穴という穴から卑猥なグチョグチョという音を聞きながら、彼女は絶頂が近づいているのを覚った。

「あああ……そんなにエグいチンポでオマンコ抉つたら……だめだめっ……い、いくっ！
いくうううううううううううッ……！」

ステラの背筋から脳天まで電撃が駆け上るような快感が走った。それを狙いすましていたのか触手ペニスから「ゴポゴポッ！」という、何かが噴出される音がステラの下部に響いた。彼女はモンスターから絶頂を導かれた挙げ句、精子を子宮に浴びたのだ。そこから先の記憶は酷くあやふやだった。二十本目の触手ペニスから汚汁が蜜壺に吐き出されてから、ステラは射精の数を記憶に残すのをやめた。全身にモンスターの精液がぶつかけてしま、兜の飾り羽根は歪められて赤鎧の肩や胸が白濁色に穢されていた。何度も叩き込まれた絶頂の余韻を引きずって、モンスターたちが去つた後もしばらく身体がピクピクと痙攣を続ける。

寝そべった大地から見上げた梢の狭間の空はモンスターたちに犯される前の夕暮れとまるで同じように見えたが、それはもう翌日の払暁だった。一晩中、肉体を弄ばれたステラは口内に残る生臭い精子を嚥下して、自分がモンスターたちにレイプされたのを再認識する。

遠くで夫の声が聞こえたようだが、快楽に支配されたステラにはどうでもいいものでしかなかった。

—あの時から二年が経った今、ステラは忌まわしいその場所に立っていた。

夫がステラと別れた理由はモンスターから新妻を守れなかったからということだ。あまりにも自然な事の成り行きに彼女は涙も出なかった。森の中で不自然にひらけたこの広場で自分は……ステラはそう考えると身体がいやらしい熱を帯びてくる。そして二年前の再現のようにモンスターが茂みの奥からやってきた。現れたのは片手に杖を持ち、老人の皺のように弛んだ肉体のドルイドと呼ばれるモンスターたちである。

彼女は腰に下げている剣の柄に手を掛けようとしてやめた。ステラは棒立ちのままドルイドが何をするのか興奮気味に待っている。自分は何を期待しているのか——脳裏にそんな疑問がよぎったが、その答えを知っているのもまた自分であった。モンスターに吐き出された白濁の感覚が下腹部に甦り、不意にそこをグローブをはめた右手でさすってみる。あれから男を漁りまくったが、満足できる性交は一度もなかった。むしろモンスターにレイプされた快楽が引き立ってしまうほどである。

ドルイドはステラに近づくと、口から長い舌を出した。彼女の素肌をその長い舌が味見するように舐めていく。その行為の不快感よりも、滅茶苦茶にレイプされてしまうのを望んでいる自分にステラは愕然とした。二年前、モンスターから刻まれた陵辱の烙印が、底なしの飢えた性欲となってステラの身体を灼き始める。何かに操られるようにステラはしゃがみこんで自らショーツを脱ぎ、卑猥に色づいた割れ目を敵に見せつけた。彼女は二年前の辱めを思い出し、モンスターの前で自慰に耽りだしたのだ。

(クリトリスがもうこんなに堅くなってる……)
女戦士は股の鎧の中で指を使って猥褻な音色をクチュクチュと奏で始めると、ドルイドたちのそれに呼応したかのように仲間を呼んだ。ドルイドたちの長い舌がステラの肉厚の唇の中へと乱暴に入っていく。彼女が喘いだ次の瞬間、ドルイドの唾液が口内に注がれてきた。

「ん、ごくっ……んぶっううう……ごきゅん……んんんんんん〜！」
それを全て呑み込んだとき、ステラの股ぐらから蜜液がドロドロと流れ出てきた。

「んぐあッ……な、なにこれ」と戸惑いを隠せない彼女が呑み込んだ唾液には、強烈な睡淫効果があつたのだ。ホイミスライムから犯されたとき以上の性衝動が、爪先から頭の天辺までどくと突き抜けていった。ドルイドはステラの胸鎧の上から乳房を揉んでいく。すると乳首にむず痒いような感触を彼女は感じた。その感触はやがて勃起したペニスのごとく、内圧に押し上げられるような喜びにすり替わっていく。

「ああっ……なにかくる……き、きちやうよお！」
ステラの身体に初めて訪れる得体の知れない快感。突然、胸鎧の中でビュクビュクと液体が飛び出し、それに合わせて「いひいひいッ！」とステラは気をやっつけてしまう。胸鎧の隙間から白い液体が幾つもの筋を引いて、贅肉のない引き締まった腹部に流れ落ちてきた。

「あう……はあはあ……ま、まさか……母乳なの……？」

ステラは自分の身に何が起きたのかわからなかった。ドルイドが胸鎧を破壊すると中身の乳房が重々しい量感で弾み、その先端からは乳白色の液体がこぼれている。彼等が胸を揉むたびに乳首からはミルクがびゅくびゅくと弧を描いて吹き出し、女戦士の玉のような柔肌を淫猥に濡れ光らせた。胸から噴出したそれをドルイドたちは乳首に吸い付いて味わい尽くす。彼女の乳房は甘ったるい味と匂いのミルクを溜め込んだ卑猥な乳玉に成り下がってしまった。

射精ならぬ射乳した彼女は頬を真っ赤に染め、両乳首から滾々と湧き出る母乳に群がるドルイドたちを眺める。ステラの股間の割れ目に杖の先をぐりぐりと押しつけ愉しんでいたドルイドたちは、下半身から血管の浮いた太い生殖器を出した。その姿は醜悪で不気味な笑みを浮かべているようであったが、ステラは二年前のあの日からこんな醜いモンスターに犯されることを忌避しながらも心待ちにしていたのだ。

モンスターの脈打ったペニス、彼女の狭い膣口からさらに内奥へと進んでいく。
「おおおっ……おふううう！ チンポが全部入っちゃった……うふふふ……わたしのオマンコ、気持ちいいでしょ？」

睡淫液は女戦士の理性を確実に麻痺させていた。モンスターを蠱惑的に誘いながらステラは腰を上下に振って、膣内に収まっている異種族のペニスの堅さに悦びの表情を見せる。もう一匹のドルイドが背中を地面につけたステラの巨乳にペニスを挟み込んだ。胸の谷間に埋もれた亀頭が乳圧を受けてさらに大きくなっていく。彼女は両手でペニスを扱きながら己の身体が今までもよりも淫乱になっていくのを感じた。もう引き返せないのかもしれない——ステラは胸の間から勢いよくぶちまけられた白濁液を顔面で受けながらそんなことを考えた。

二年前、ここでレイプされたとき、帰巢本能のようなものをモンスターから身体に植え付けられたのだろうか。果たして何のために自分はここに『呼ばれた』のか……ステラが次の推察段階に移ろうとしたとき、子宮に熱く滾る精子がそれを遮った。

「たくさん出てる……精液がドピュドピュしてらう……ああああッ！」
身体の奥で射精され絶頂を迎えた彼女の脳内に直接声が聞こえた。

『このメスの肉体は我等の子を孕めるようだ。その証拠に我等の声が聞こえている』
『我等の仲間から最初に犯されたとき、呪いをかけた奴がいたようだ。膣に吐き出した我らの精子はこの雌に確実に受精する』

「な……に……この声……？ モンスターの子なんて孕むわけ……いやあ……精子出さな
いで……種付けしないでえ……」

ステラは声に出して否定したが、身体は快楽から逃れられなかった。ドルイドたちはステラの口にペニスを入れて次々に射精してゆく。股間の割れ目からは夥しい量の精子が糸を引いて地面に垂れており、さらに別のドルイドがそこに勃起した生殖器を嵌めて白濁液を内部に出した。



彼女はドルイドたちに輪姦され、気がついたときには腰を振りながら、舌をちろちろと踊らせて快楽という狂気に意識をほとんど奪われていた。

「んぶう……もつとお、チンポほしいのお……ステラのオマンコ……チンポでやりまくってくらはあ……えひいひい……」

ステラの顔は白雉のようにならなく、赤鎧を脱がされて半裸の状態にされていた。グローブに包まれた両手が虚しく上下運動を繰り返しているのは、モンスターに延々と淫淫させられた動作が反復されているのだろう。

『人間の世界では我等モンスターの子を孕めないと言われてるらしい』

『……女の討伐者を恐れさせないためか』

『それともモンスターが人間から生じていると知れば、我等を同族と捉えて倒すことに躊躇する者が必ず出てくるからか……。ただ、我等を倒すという目的で出向いているこの様な女が減ってしまったら我等の繁栄もなく、人間どもの情などというものを利用することもまた、我らにとつて望ましい世界を構築することにならう……。』

『まあ、いい。この女戦士は母胎として最適だ。我等の子を孕む【製造体】として使うとしよう』

ステラは微かに残る正常な意識で複数の声——ドルイドたちが語る内容を反芻した。モンスターは魔王が造り出した説は嘘だったのだ。モンスターが人間から生じることこの世界の支配者たちは隠しているのだろう。その方が色々都合が良い。モンスターがモンスターである限り、人間同士の殺し合いには便宜上ならないのだから。ステラはそこまで理解したが、モンスターの極太ペニスを股ぐらに突っ込まれてすぐに意識を散らされた。

「いいッ……いいですう……デカチンポ……チン……んぐう……た、たくさん……ザーメンでステラを……肉奴隷に……ぎひいひい……ッ」

ステラの瞳は輝きが完全に消え失せ、母乳と精液の溶け合った白濁の水たまりに溺れながらモンスターたちから次々と犯されぬいてゆく。

ここは自らの意思で抜け出すことが困難な抗いきれない絶望的な快楽で固められている。一挙手一投足、あらゆる行動や行為が性的な興奮に繋がり、思考や感覚を中心とする人間的なものが一切排除され、原始的な性的感覚のみに作り替えてしまう。

夫や勇者達と過ごした過去の記憶は、いまやどす黒い快楽に上書きされてしまった。女戦士の身体は精液を搾ることしか用途のない文字通りの肉穴玩具となり、二度と這い出ることの出来ない深淵の闇に引き擦りこまれた。

▼

ステラが石壁の牢獄に連れてこられて数日が経過した。

正確な日数がわからないのは、牢獄の天井近くに一カ所だけある格子窓の陽光だけが時間の流れだったからだ。ステラは牢獄の隅で女戦士の鎧姿で両手両足を鎖で繋がれていた。彼女が再び鎧を着せられたのは、人間を犯している実感に浸りたいというモンスターたちの要望である。

そんな女戦士の腹部は熟れた果実の房のように膨らんでいる。ステラはついに受胎したのだ。

今度生まれてくる子供はどんなモンスターかしら——そんな暗い悦びが、墜ちた女戦士の肉体に邪悪な活力を与える。彼女は今日も肉奴隷となり、たくさんの子種を腹に仕込んでもらう。女戦士からモンスター製造体に転職したステラは壊れた微笑を浮かべ、大きくなった腹を愛おしげに見つめた。

▼

おつかれさまでした。

りせつとぼたんを おしながら
でんげんを きつてください。

あとがき

どうも八潮タイガーです。

本誌は以前にコピー誌として頒布された『人妻女戦士・禁忌の魔姦』の増補改訂版です。表紙や漫画は有沢氏に本誌のため描き下ろしていただきました。

女戦士——露出度の高いピキニアマー、ふわりと巻き上がった紫の長い髪、凛とした美しい顔立ち。その姿に胸を鷲掴みにされた、かつての少年達は多いのではないのでしょうか。そして、かつての少年達の中の一人として本作に妄想を書き綴ってみました。読者の皆様に喜んで頂ければ幸いです。

それでは次作でお会いしましょう。

人妻女戦士・禁忌の魔姦 (増補改訂版) 発行日/2010年8月15日 企画・制作:セルロイドブラザーズ
小説/八潮タイガー 挿絵・漫画/有沢純春 協力/小杉光太郎 高崎隆司 秘密結社M
※本誌は十八歳未満の方の購読を禁止しています。

本誌は18歳未満の方の購読を禁止しています。

